

発行所

札幌市北区北15条西7丁目
北大医学部同窓会
TEL&FAX (011) 706-5007
E-mail: furate@med.hokudai.ac.jp
http://www.med.hokudai.ac.jp/~alum-w/

編集人 田中 伸哉
発行人 浅香 正博

北大医学部同窓会新聞



CONTENTS

- (1)・100周年記念事業へのご参画、ご協力をお願いいたします……浅香 正博
・創立100周年記念事業基金募金
～今年度が佳局……吉岡 充弘
- (2)・教授就任のご挨拶……南須原康行 安齐 俊久
・故 岩崎喜信名誉教授(47期)を偲んで……寶金 清博
・先生ご無沙汰しています……小林 邦彦
- (3)・新世紀の医学に向けて(31)……七戸 俊明
- (4)・第56回北海道大学医学展 総評……篠 裕輝
・「父の名前を百年記念館に」……西澤 典子
・展示資料に関する情報ご提供のお願い
- (5)・近年の公認運動系学生団体の大会結果等の報告……松井 優祐
・フラテ104号発行のお知らせ
・告知板
- (6)・告知板
・事務局からお知らせ
・北海道大学医学部創立100周年記念事業募金へのご協力をお願い
- (7)・新刊書紹介
- (8)・北海道大学医学部創立100周年記念事業ウェブサイト開設
・北海道医学会からお知らせ
・同窓会費の納入は口座振替で
・同窓会費納入のお願い
・ご逝去者・一面の写真説明・編集後記

「晩秋」

たか はし あつし
高橋 敦(42期)



100周年記念事業へのご参画、ご協力をお願いいたします

北海道大学医学部創立100周年
記念事業後援会 会長 浅香 正博(48期)

北海道大学医学部は2019年に創立100周年を迎えます。これまでに医学部百年記念館の建設を柱とする創立100周年記念事業計画を策定し、記念事業基金趣意書を皆様のもとにお送りいたしました。大正8年に開学して以来、これまで9500名を越える方々が北海道大学医学部を卒業され、地元北海道はもとよりわが国の津々浦々で重要な職務を遂行し、わが国の医療にきわめて大きな貢献をして参りました。100周年は北海道大学医学部の歴史の区切りの中でも最も大きなものと思われまふ。この機会に医学部同窓会の悲願でありました北海道大学医学部百年記念館を建設することを計画いたしました。この記念館には北海道大学医学部のこれまでの歴史を展示する部屋の他、各期の同窓会や学会、研究会に利用できる多目的な部屋ができることになっております。

100周年の記念行事を行うにあたって最も重要なことは事業遂行に必要な資金を集めることです。北海道大学医学部創立100周年記念事業実行委員会ではその寄付目標を10億円と決めました。創立90周年の際、集まった寄付総額は5億円でしたから決して達成不可能な額ではないと思ひます。フェイスブックの創設者の

ザッカーバーグ氏が保有する自社株の99%を社会貢献活動に寄付すると明らかにしたことがニュースで流れ話題になりました。時価にすると5兆5千億円という超巨額を寄付するという行為に驚いた方が多かつたと思われまふ。わが国では財産を社会貢献活動に寄付するというのが一般的ではありません。米国の1年間の個人寄付総額が約27兆円であるのに対し、わが国は約7400億円に過ぎません。公共への寄付行為の習慣の乏しいわが国ですが、北海道大学医学部創立100周年という大切な区切りの年を迎えますので医学部同窓会の皆様方からのご支援を心から期待してあります。なお今回の寄付行為にあたり北海道大学のフロンティア資金を利用させていただけるので、個人、法人共に税法上寄附金控除の優遇処置が受けられことになっております。

募金活動を始めてから1年が経過し、約1億7千万円の寄付をいただきました。90周年の時よりも多くの金額が集まっておりますが、目標に達するまでにはまだまだの段階です。同窓生の各位におかれましては何とぞこの趣旨にご賛同いただきまして、本事業達成のために格別のご支援、ご協力を賜りますよう心よりお願い申し上げます。



創立100周年記念事業基金募金 ～今年度が佳局

よし おか みつ ひろ
吉岡 充弘(60期)

北海道大学医学部創立100周年記念事業として、「百年記念館」の建設と「教育研究基金」の創設に向けて募金活動を開始しました。本年8月現在、募金額は目標の17%にとどまっております。「百年記念館」の着工に向け、募金活動も今年が佳境・佳局であるとの認識から、9月より専任職員を配して事業活動を強化するとともに、執行部を含めた事業担当教授らによる企業訪問・寄付依頼を行うこととしました。また、ご寄付頂いた同窓生への本紙上での謝意表明のみならずご芳名を刻印した銘板を「百年記念館」へ掲示させていただきます。さらに、高額寄付者に対しましては医学部長が直接感謝状を贈呈させていただきます。本年度中に70%達成を目標とし、同窓生諸先生の一層のご協力を切にお願いする次第であります。

100周年記念事業は、「百年記念館」を建設することだけでなく、北海道大学医学部と同窓生との交流を促進し、年代を超えた意見交換の中から新しい北海道大学医学部を創造していく端緒になると考えています。

国立大学では大学運営の基盤となる運営費交付金の減額が続いています。「教育研究基金」の創設を契機とし、これを有効に活用することで、医学・医療分野における諸問題解決に貢献できる人材の育成をさらに推進することが可能となります。特に国際

規模の問題に立ち向かう姿勢を育むグローバルな教育を実践するためには、更なる教育基盤の充実が求められます。具体的には、学生交流を通して、異文化・文明に属する人々と接する機会を増やし、国際医学教育交流を通じた取り組みの推進が必要となります。医学部では「国際連携室」に専任の教員を配置し、これらの取り組みをスタートさせました。また、北海道大学の強みや特色を活かした、「国際連携研究教育局」が北海道大学に創設されました。この組織は世界トップレベルの教員を国内外及び学内から結集した総長直轄の教員組織です。その一つである「量子医理工学グローバルステーション」はスタンフォード大学からユニット誘致を実現し、設置されました。スタンフォード大学の教員と連携し、医理工学院・医学研究院と北海道大学病院(陽子線治療センター)において研究・教育が進められています。医学部・医学研究院はこれらの諸活動を推進する司令塔としての役割も期待されています。北海道大学医学部を、北海道はもちろん日本や世界における医学医療の拠点として発展させることが、ご寄付を頂いた同窓生諸先生や企業の皆様に対する責務と考えておりますので、更なるご支援のほどよろしくお願ひ申し上げます。

教授就任のご挨拶



北海道大学病院
医療安全管理部
南須原 康行
(64期)

この度、平成29年7月1日付で、北海道大学病院（以下、当院）医療安全管理部教授を拝命いたしました。このポストが設置された理由としては、平成27年に2つの大学病院が大きな医療事故によって特定機能病院の承認が取り消され、それをきっかけに特定機能病院の承認要件が見直しとなり、医療安全管理責任者（医師）および医療安全管理専従医師の配置が義務付けられたこ

とが大きな要因と思っております。当院では、平成20年度から小生が医療安全管理部の専従医師（准教授）として仕事をしてきました。この間、当院における医療安全管理業務はもちろん、社会における啓発活動、平成27年10月から施行された医療事故調査制度などの仕事を精力的に行ってきました。そして、これらの活動の中で、医療安全管理における医師の役割は非常に重要であるということに改めて感じました。医師はチーム医療の中では、上位にいるのではなく、他のメディカルスタッフと対等の立場であるべきです。しかし、実際に発生する医療事故、特に、大きな事故においては、医師が当事者

になることが圧倒的に多いこと、大学病院という巨大組織においては医師が良い意味で強いリーダーシップを発揮しなければ物事が進まないことも事実です。また、北海道大学医学部は、他の大学と比べて医療安全に関する学生教育が不足しています。医学生に対する医療安全管理の講義は、現在は第4学年の臨床統合講義としての1コマのみです。

今後は、当院における医療安全管理業務をさらに充実させ、患者に安全・安心な医療を提供する本邦におけるトップランナーとなるように全力を注ぐ所存です。教育については、医学部と協力して学生教育、さらには、臨床研修センターと協力して研修医の教育

にも力を注いでいきたいと考えております。医療安全管理は、実際の活動が最も重要であることは言うまでもありませんが、さらに発展させてその質を高めていくためには、科学的・学術的アプローチが必須であり、その中心となるのは大学病院であると考えます。情報発信が大学病院の責務と考え、他の医療機関との協力も積極的に進めて、高いエビデンスとなるような臨床研究も精力的に行っていきたいと考えています。



循環病態
内科学教室
安齊 俊久

この度、平成29年9月1日付けにて循環病態内科学教授に着任いたしました安齊俊久と申します。伝統ある北海道大学で教室を担当する重責に身の引き締まる思いであります一方で、以前より憧れていた生命科学の拠点において、学問を追究できる喜びに溢れ、期待に胸を膨らませております。

私は、平成元年に慶應義塾大学医学部を卒業後、内科研修の中で循環器診

療の醍醐味に魅了され、母校の循環器内科に入局いたしました。大学で心不全の基礎研究に従事しておりましたが、常に論文を引用していたカリフォルニア大学サンディエゴ校のH. Kirk Hammond教授のもとで研究したいと強く思うようになり、無謀にも幼い子供と妊娠中の妻を連れ、無給で留学いたしました。当初は大変辛い時期を過ごしましたが、必死で研究をするうち、幸い米国心臓協会のグラントが取得でき、最終的に3年間の留学生活で多くのことを学びました。帰国後は、慶應義塾大学循環器内科の助手、講師として12年間、病棟の責任者を務めつつ、臨床・基礎研究を指導してまいりました。平

成23年より国立循環器病研究センター（国循）に心臓血管内科部長として赴任し、主に心不全の診療、研究に従事し、多施設共同研究を複数主導したほか、教育研修部長を兼務し、連携大学院による学位指導も行っていました。

これまでのキャリアでは、臨床と研究を常にリンクさせ、日常臨床で得た疑問を臨床研究で検証した上で、基礎研究で実証し、臨床に還元させることを重視してきました。近年、基礎研究を行う医師や留学を志す若者が減少しつつありますが、良き臨床医となって質の高い臨床研究を行うためには、基礎研究の経験が大変重要であり、そうしたフィジシャンサイエンティストを

育成し、将来の指導者を育てることが大学の使命だと考えております。

また、北海道における循環器診療の最後の砦として、国循で取り組んできた大動脈弁狭窄症、僧帽弁閉鎖不全症など構造的疾患に対する経カテーテル治療のほか、植込み型補助人工心臓、心臓移植など高度医療の更なる充実を図り、国循で国内最初に発足させた難治性心不全に対する多職種協働チームによる緩和ケアなども導入し、道内の皆様の健康と幸福のために全力を尽くす所存です。

今後ともご指導ご鞭撻のほど、宜しくお願い申し上げます。



故 岩崎喜信 名誉教授(47期)を偲んで

北海道大学医学研究院
脳神経外科学教室 教授 寶金 清博(55期)

北海道大学名誉教授、岩崎喜信先生は、本年3月23日に急逝されました。御家族からは、脳梗塞発症後、いったん、軽快されましたが、その後、間質性肺炎を併発し、治療の甲斐もなく、急逝されたと伺っております。

お元気でオホーツク地区の地域医療に貢献されていると思っていた矢先のこと、親交のあった関係者は、深い悲しみに包まれました。ただ、ある意味、岩崎先生が信条としていらした「潔さ

を感じ、先生らしい別れ際であったような思いがあります。

岩崎先生は、脳神経外科領域では、脊髄・脊椎を専門にされ、多くの業績を残されました。本教室において、脊髄外科の研究・教育・診療チームを指導され、多くの優れた後輩を育てていただきました。北海道大学脳神経外科を外部から見た場合、やはり、脊髄疾患の外科治療における日本のリーダーという評価が圧倒的です。そのような

名声を確立した指導者のお一人が岩崎先生でした。

岩崎先生は、大の読書家であり、医学以外のことにも深く広い造詣があり、実に多くのことを教えて下さいました。岩崎先生と一緒すると、博覧強記ぶりに圧倒され、すっかり聞き手役に回りましたが、価値のあるお話を伺うことができました。

日本脳神経外科学会では、脳神経外科医の向かうべき方向を正しく見定めていらっしゃると思っております。医者にとって、最も大切な基軸は、「患者」であることは言うまでもないことかと思えます。ただ、日常の様々な意思決定や、あるいは、組織の判断の際に、私たちが最も大切にしなければ

ならないこの「Patient First」の考えが、しばしばsecond, thirdにされることを岩崎先生は的確に指摘されていました。伝統ある教室の顔であり、それを背負いながら、孤高の正論を述べるのは、岩崎先生だからこそできたと思っております。

忽然と、潔く、私たちの前から去られてしまった岩崎喜信先生。どうか、いつまでも、私たちの輪の真ん中で、語って下さい。先生の語り口は、今でも、耳に響き、御姿は、鮮明に私たちの脳裏に残っております。

信念を曲げず語り続けて下さった、孤高と優しさの先生、岩崎喜信先生の御冥福を心からお祈り申し上げます。

先生ご無沙汰しています



名誉教授
小林 邦彦
(42期)

医学部同窓会新聞は、大学在職中はもとより大学を離れた現在でも送付されてくると直ぐ隈無く目を通し、先輩・後輩の動向や人事、受賞のこと、催し

や慶弔等々いろいろな情報がいち早く得られる情報源として大いに利用させて頂いています。この中の記事の一つに「先生ご無沙汰しています」という不定期な項目があります。これは退職後暫くたった名誉教授の近況を後輩の現役教授が直接インタビューしてお話を伺いそれを纏めると言うもので、現役教授と名誉教授との掛け合いが面白く、また昔習った先生を懐かしく思い起こ

させてくれる私の好きな記事の一つです。実は私は現役時代にインタビュアーとしてお二人の名誉教授についてこの記事を書いています。お一人は、故山田尚達名誉教授(小児科)(当時85歳、2000年)、もうお一人は松本脩三名誉教授(小児科)(当時70歳、2001年)です。多分「…ご無沙汰しています」を一人で2度も書いたのは私だけだと思いますが、これは小児科の歴代名誉教授が長寿であられた事を示し、三人の名誉教授がご存命であった時期もあります。

先日同窓会新聞の編集子から、「先生ご無沙汰しています」を書いて欲しいと

の依頼が来ました。さすがに今度はインタビュアーとしてではなく、インタビューを受ける側なんだと理解し、今さらながら自分の歳を自覚しました。ところで編集子によると最近インタビュー形式を執らず、本人に自由に書いて貰うのが趣性なんだそうです。

さて、私は、平成元年から臨床検査医学講座の二代目教授として5年、平成6年から小児科学講座の五代目教授として10年間務め、平成16年に退職して今年で13年になりました。大学を離れて13年も経つと、大学のスタッフも大きく様変わりしており、そろそろ忘れら

れている頃かと思っています。私は、生まれも育ちも札幌、それもススキノ中心部(南6西4)で、昭和35年(1960年)に医学進学課程に入学しています。当時は60年安保の真っ最中で、講義も殆どなく暇をもてあました同級生と当時休部となっていた全学水泳部の再建を図り、さらに医学部にスキー部を創設するという事を始めました。従って夏は水泳、冬はスキーの合宿や大会、春と秋は部費稼ぎのためにダンスパーティや学会の手伝い等々のバイトで頗る忙しい学生時代でした。昭和41年に無事医学部を卒業したのですが、この頃丁度インターン闘争の最中に当たり、インターンボイコットを敢行、さらに国家試験のボイコットも行い、これまた

将来どうなるのかと大変な時期でした。当時国家試験は春と秋の2回だったので私たちの大部分は秋に受け幸い通りました。昭和42年に小児科入局と共に大学院を目指しましたが、今度は医学部を中心に大学院反対、学位取得反対の運動が起こっており、よくよく我々の年代は反対の壁にぶち当たるものだと不思議に思ったものです。そんなことを余所に大学院は生化学第一講座(故平井秀松名誉教授)で過ごし、4年目(1971年)に分泌型IgAの仕事が国際専門誌にacceptされ、それがそのまま学位論文になり、これがもとでこの年の秋にはIgAの発見者であるベルギーの故JF.Heremans教授に招かれ、2年間大いに研究を発展させる事が出来ました。

帰国後、大学にポストもないので小児科と生化学の間をウロチョロしていたところ、1975年に生化学の助手に推されました。しかし採用の条件が付き米国アラバマ大学で、ある酵素の分離・精製、特性などの研究を手伝って完成させて来いというものでした。早速米国に渡りましたが、幸い研究はスムーズに行き、2年で成果を生化学分野の一流誌J.B.C(1978年)に発表して役目を全うし、帰国後そのまま生化学の助手で残りました。しかし将来的に生化学者として基礎に留まる自信も持てないでいた時、小児科の松本教授(現名誉教授)の推薦と山口大学小児科の故梶井正教授(北大29期)の強力な要請で山口大学小児科に移ることになり、1979年から小

児科助教授として平成元年(1989年)までの10年間を小児科の臨床医および研究者として大いに暴れまくって来ました。山口大学での業績が評価され、平成元年臨床検査医学の教授として北大に呼び戻され、その後小児科教授に異動し平成16年に退職したことは既に述べましたが、退職後すぐ昔の水泳部再建仲間の故川村明夫、北檢会/札幌北檢病院長(北大44期)に請われて小児科顧問として迎えられ、未だ週数日は外来などをしながら若い人たちの書く論文のお手伝いをしたりして楽しくやっています。皆さんのご健勝をお祈り致します。

新世紀の医学に向けて (31)

献体を使用した臨床医学の教育および研究の重要性

消化器外科学教室II
七戸 俊明 (67期)



はじめに

本稿をはじめに、篤志献体にご賛同いただいた献体者の尊い御霊と、肉親のご遺体をお預けいただいたご遺族に衷心より感謝の意を申し上げます。

私は上部消化管の外科手術を専門としているが、平成23年に急逝された近藤哲先生(前腫瘍外科教授)のもとで平成20～22年度厚労科研費補助事業『サージカルトレーニングのあり方に関する研究』に参画させていただいたことをきっかけに、『臨床医学の教育及び研究における死体解剖のガイドライン』の策定に関わり、現在も日本外科学会CST(cadaver surgical training)推進委員を務めさせていただいている。

本稿では、臨床医学における献体使用の現状と北大での実施状況、並びにその将来展望について述べる。

臨床医学の教育及び研究における死体解剖のガイドライン

平成9年に輸入遺体を用いた歯科インプラント手技の講習会が新聞報道された。これに対し、厚生省(当時)が「死体損壊罪に当たるおそれがある」との見解を発表したため、遺体を用いた手術手技研修(cadaver training:カダバートレーニング)が「グレーゾーン」となった。その後、内視鏡手術の普及とともにカダバートレーニングの有用性が海外で認識されるようになり、国内での実施に向けた行政の対応が求められるようになった。これを受けて、平成20～22年度厚労科研費補助事業においてガイドライン案が作成され、引き続き平成24年に日本外科学会と日本解剖学会の連名でガイドラインが公表された。これにより、わが国において臨床医学の教育と研究を目的とした献体の利用が可能となった(表)。

カダバートレーニングへの期待

昨今、新規術式の導入や高難度手術の実施における医療安全対策として、病院組織のガバナンスの強化が図られている。その一方で、医学の進歩には

新たな治療法の開発は必須であり、次世代の術者の養成も欠かせない。カダバートレーニングはこれらを推進する新たなアプローチとして期待できる。

従来、手術手技研修はon the job training(OJT)により行われてきたが、ミスは許されない高難度手術において、カダバートレーニングはOJTにかわる有効な教育手法である。また、新規術式の導入に先立って献体を使用した手術リハーサルを医療スタッフとともに重ねることも可能である。さらに、医療機器等の研究開発における献体利用は動物実験とヒトでの臨床試験を橋渡しするプラットフォームとしても期待しうる(図)。

北大での実施状況

平成25年の白菊会総会での趣旨説明を経て、北海道大学病院CAST(cadaveric anatomy and surgical training)実施委員会が設立された。本委員会は臨床研修センター長を兼務する消化器外科学教室IIの平野聡教授を委員長とし、解剖学教室の渡辺雅彦教授の監督下に献体による手術手技研修などを運営する組織である。

平成28年9月に北大初の献体を使用した手術手技研修が行われた。献体の保存にはオーストリアで開発されたThiel法を用いた。保存液にはホルマリンのほかにプロピレングリコール等を含有しており、生体とほぼ同等の組織の柔軟性と質感を保持することが可能である。平成28年度に研修会等を実施した診療科は、消化器外科I、消化器外科II、整形外科、脳神経外科、泌尿器科、耳鼻咽喉科、スポーツ医学診療科の7科であり、合計19回の研修会等に、延べ123人が参加した。

平成29年度の実施計画は厚生省の「実践的な手術手技向上研修事業」に採択された。新たに呼吸器外科が加わり、合計53回の研修会等が予定されている。その中には循環器呼吸器外科松居喜郎教授が開催する第70回日本胸部外科学会の関連プログラムである「献体によ

る食道内視鏡手術研究会」など、公募による研修会も予定している。

現状の問題点と将来像

現在は解剖学実習室を使用しているため、学生の解剖学実習期間は研修会等の実施が不可能である。今後のニーズの拡大に備えるためにも、専用の臨床解剖実習室の設置が喫緊の課題である。臨床解剖実習室の設置と医療機器等の購入には約4,000万円の総事業費が必要であり、個人、医療関係者、企業等からの寄付金を募ることで、早期に実現を図りたい(注)。また、大学の法人化に伴い、国からの解剖体経費の予算配分はすでに廃止されているため、献体業務にかかる費用と実務の負担増に対して、学生教育と解剖学教室に無理のない持続可能なシステムの構築が必要である。

カダバートレーニングでスタートした北大の献体使用であるが、今後は新

たな術式の研究開発や医療機器開発などを通して、わが国の医療と産業の発展に貢献できることを期待している(図)。

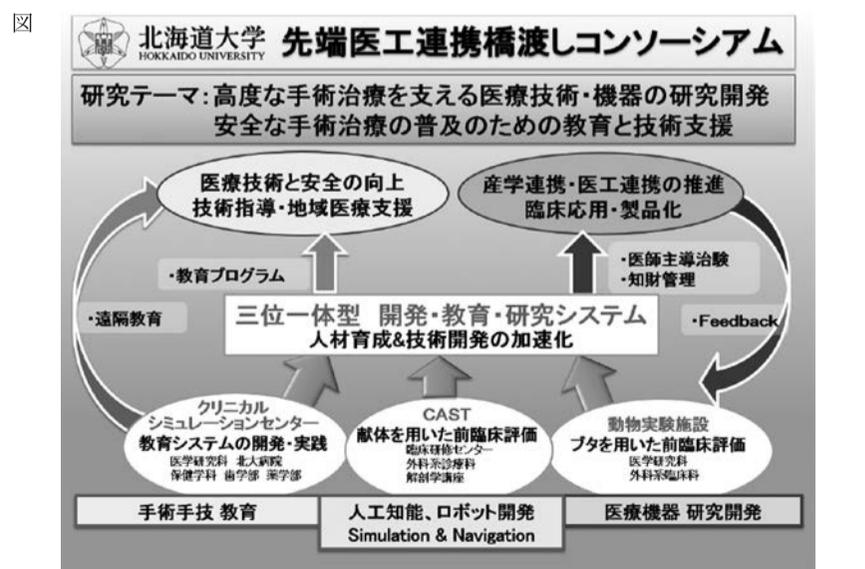
終わりに

外科教育を教室のテーマに掲げる平野教授のもと、カダバートレーニングという新たな分野に関わることで、外科系各学会での発表や全国の大学での講演、厚労省・文科省の担当官や国会議員との意見交換など、数多くの貴重な経験をさせていただいている。また、北大でのカダバートレーニングの実現には、解剖学教室の渡辺教授、技術職員の清水秀美様をはじめ、多くの方々のご支援をいただいた。ここに関係各位のご協力に深く感謝の意を表したい。

文献1. 臨床医学の教育及び研究における死体解剖のガイドライン. 日本外科学会・日本解剖学会: <https://www.jssoc.or.jp/journal/guideline/info20120620.pdf>

表：臨床医学の教育研究における遺体使用の例

教育・基本的な医療技術の習得 ・基本的な手術手技、標準手術の習得 ・高度な技術を要する手術手技の習得	研究・手術手技に関連する臨床解剖研究 ・新規の手術手技の研究開発 ・医療機器等の研究開発
---	---



注：『北海道大学における遺体を使用した外科解剖・手術手技研修事業』. 総事業費4,000万円。寄付窓口：北大フロンティア基金(支援先：北大病院、プロジェクト名：医学・病院 CAST事業)。お問合せ先：北海道大学病院 総務課CAST事業担当(臨床研修センター内)、電話011-706-5604、FAX011-706-7627、Eメールshosa1@huhp.hokudai.ac.jp

第56回北海道大学医学展 総評



第56回医学展
副実行委員長

しの ゆう き
篠 裕輝
(医学部医学科4年)

メインストリートに若葉生い茂る初夏、6月の北大祭にて本年度56回目となる「北海道大学医学展」を開催致しました。医学展は医学部医学科の有志による実行委員会が企画・立案・運営する、「医療・医学」について市民の皆様幅広く伝えていく催しです。今年5000人以上もの来場者を迎えて盛況となり、スタッフたちは予期せぬトラブルや忙しさにてんてこまいになりながらも、無事に二日間の日程を終えることができました。

医学展が中核に据えているのは市民の方々と医療・医学、医学生とのふれあいであり、同時に、市民の方々に健康や医について新たな意識を持っていただけるよう心がけています。また、毎日のように膨大な座学に追われている学生たちにとっては、貴重な実体験の場でもあります。これらを踏まえ、医学展の展示は毎年その中身を刷新し続けています。

今年の医学展では、5つの医学展企画に、4つの外部団体企画、医学部部活による模擬店が行われました。

医学展企画は検査体験、救急体験、科学体験、ハンディキャップ体験、いがくの窓口の5つです。検査体験ではエコー・心電図、肺活量測定といった検査を学生が市民の方々に対して行います。救急体験ではAEDを使った心肺蘇生体験のほか民間救急車等の見学ができます。科学体験では、医療から少しだけ離れ、味覚の仕組みや脳波を使ったゲームなど、基礎医学に通じる医学体験を行います。ハンディキャップ体験では車いすや弱視・全盲体験など、障害について体験できます。いがくの窓口では、病院実習に赴いている上級生たちが、診察など医療の基礎を説明していました。

外部団体企画は、病理医の市原真先生による講演会、LGBTカフェ、漢方カレー、ぬいぐるみのお医者さんの4つです。いずれも普段はなかなかお目にかかれないような企画で、来場者の方から好評でした。

以上の企画を延べ100人以上もの医学科生によって運営致しました。大きな問題も起こることなく、たくさんの方々にお祭りを楽しんでいただき、今年の医学展も成功裡に終わったと感じております。

今年度の医学展開催におきましては、大学各局、医学部同窓会、多くの企業、

法人の皆様方にも多大なご支援・ご協力を頂きました。この場をお借りして厚くお礼申し上げます。

医学展の詳細につきましては、当公式 website : <http://hokudai-igakuten.org> をご覧ください。



BLS人形で心肺蘇生体験



医学展のメンバー。1年生から4年生までの有志が集まって開催された。

「父の名前を百年記念館に」



にし ざわ のり こ
西澤 典子
(56期)

亡父河瀬 登は医学部24期の内科医である。大変苦学したようだが、柔道部に所属し、囲碁を愛好し、北大医学部で過ごした学生時代の思い出を、いつも宝物のように語っていた。男子の

誕生を強く希望していたとのことである。女子には医業を継がせられない、と思っていたらしい。私が父の後輩となったときには、「信じられないことが起こった」というような顔をしていた。その後、二人の妹がいずれも同窓の医師に嫁ぎ、後輩の息子が二人できて大変うれしそうだった。雷親父を絵に描いたような人であったが、晩年には「女の子を持つというのも悪くないものだ」と言っていた。大正の終わる年に生ま

れ、「老人を自宅の畳の上で看取る仕事」をしながら昭和の時代をきっちり生きて、昭和62年に肺癌を発症し、翌年、昭和が終わるとともに亡くなった。父の闘病中に生まれた私の長男は、北大医学部88期となり、呼吸器外科医として修業中である。まだまだ健在な私の母は、「おじいちゃんがこの子をみたらどんなに喜んだか」と、言い言いつけている。

このたび、北海道大学医学部創立100周年記念事業基金募金のお知らせをいただき、ふと、父が最も愛した場所に、父の名前を刻んであげたいと思った。

事務部に問い合わせたところ、丁寧なご返事をいただいた。故人の名前での銘板掲揚が可能とのことである。母に協力を頼み、また、長男にもすこしだけ出資してもらって、記念事業に寄付をさせていただいた。百年記念館には父の名前を記した銘板が掲げられるとのことである。

長男夫婦には2歳になる女の子がいる。将来どんな道に進むかわからないが、いつか、北大を見せてあげて、記念館の銘板に曾祖父の名前があることを教えてあげようと思っている。

展示資料に関する情報ご提供のお願い

医学部創立100周年記念事業実行委員会では、平成31年竣工予定の『医学部百年記念館』において展示する資料に係る情報収集を行います。

ご自宅や教室等において所有されております書籍や実験器具、写真、標本、その他北海道大学医学部及び医学の教育研究に関連する歴史的、学術的資料等のうち、北海道大学医学部にご寄贈・ご寄託*いただけるものがございましたら、下記のようにご連絡下さい。(内容をお知らせいただく手順)

「北海道大学医学部創立100周年事業収集資料 一次調査票」様式にご記入の上、医学系事務部総務課庶務担当宛にご連絡願います。

様式は、以下の方法で取得いただけます。

①ウェブサイトからのダウンロード
北海道大学医学部創立100周年記念事業ウェブサイト
(<http://www.med.hokudai.ac.jp/100th/>)

②メールまたはお電話によるご請求
医学系事務部総務課庶務担当
(E-mail : shomu@med.hokudai.ac.jp
電話 : 011-706-5004, 5085)
様式をメール添付または郵送にてお送りします。

【締切り】
平成29年12月28日(木)(必着)

【宛先】
①メールによるご連絡の場合
shomu@med.hokudai.ac.jp
(北海道大学医学系事務部総務課庶務担当)

②郵便によるご連絡の場合

〒060-8638
札幌市北区北15条西7丁目
北海道大学医学系事務部総務課庶務担当

このたびの情報収集は「一次調査」として行うものです。ご提供いただいた情報に基づき、実行委員会においてスペース等をも考慮しつつ展示方法・内容の検討を行いますので、広く情報をお寄せいただければ幸いです。お気軽にご連絡ください。

なお、後日、詳細について追加調査をお願いすることもございますのでその際にはご協力方よろしくお願い申し上げます。

また、保管場所がございませんので、現段階での現物の送付はご遠慮いた

きますよう重ねてお願い申し上げます。

(個人情報の取扱いについて)

いただいた氏名、住所、電話番号等の個人情報につきましては、厳重かつ適正に管理し、『医学部百年記念館』における展示資料の収集に伴う今後の追加調査及び連絡を行うためのみに使用させていただきます。

北海道大学医学部創立100周年記念事業実行委員会委員長 吉岡 充弘
展示物等小委員会委員長 畠山 鎮次

* 寄贈：所有権を無償で所有者から医学部に移譲すること
寄託：所有権を所有者に留めたまま、医学部において保管・展示等を行うこと

近年の公認運動系学生団体の大会結果等の報告



まつい ゆうすけ
松井 優祐
(医学部医学科4年)

この度は同窓会新聞編集委員会の指名により、僭越ながら私が公認運動系学生団体の近年の動向の取りまとめをさせていただきました。情報の収集に当たりまして各団体関係者に情報を提供していただくとともに、資料等により筆者が調査したのもございます。(個人名は敬称略)

硬式庭球部：2017王座一部男女ともに準優勝、東医体男女ともに初戦敗退。2016王座一部男子3位女子準優勝、東医体男子ベスト16。

ゴルフ部：2016東医体男子個人4位入賞男子団体優勝女子団体3位入賞、北医体男子個人準優勝、女子個人3位入賞、女子団体3位入賞。

アイスホッケー部：東医体Aプール進出、旭川アイスホッケー連盟会長杯争奪戦C

プール優勝。
サッカー部：2016東医体ベスト8、全医体ベスト4、北海道学生リーグ2部優勝・1部昇格。

準硬式野球部：2017東医体3位入賞、2015東医体優勝。

水泳部：2017北医体団体女子3位、東医体個人男子200m平泳ぎ7位上島優太郎、女子50m平泳ぎ5位五十嵐冬華、女子100m平泳ぎ2位五十嵐冬華。

スキー部：平成28年度東医体男子総合優勝、女子総合準優勝。その他個人成績多数。

ソフトテニス部：2017東医体男子個人渡辺大甫ペアベスト32梅村高橋ペアベスト32、女子団体戦準決勝進出、女子個人竹部安田ペアベスト32。

卓球部：2015東医体男子団体3位、東日本医歯薬男子シングルス3位女子ダブルス3位。

剣道部：平成29年北医体男子団体ベスト8、道医体男子団体準優勝、男子個人優勝堂本(医学科)。

バドミントン部：2017東医体団体戦女

子3回戦進出、団体戦男子3回戦進出。
バレーボール部：2017東医体予選敗退、北医体決勝トーナメント進出。

ハンドボール部：2017春学連4部2位、東医体下位トーナメント敗退。

ボート部：2017東医体男子舵手付きフォア優勝、女子ダブル優勝、男子ダブル4位総合優勝。

陸上部：2017(長野)やり投げ松島慎3位、2016(大井)男子100m鈴木久崇優勝15'30。

北虎流空手部：第18回チャレンジ空手トーナメント硬式空手一般男子軽量級松井優祐準優勝。

本記事の作成にあたりまして掲載結果の他にも、多くの優秀な大会結果の情報を提供していただいておりますが、分量の都合上一部のみの紹介とさせていただきます。

また、情報提供に御協力いただいた各団体関係者の皆様にこの場をお借りして御礼申し上げます。



空手部の練習試合の様子

フラテ104号発行のお知らせ

医学部フラテ編集部

フラテ編集部では今年度もフラテ発行に向けて準備を進めております。104号の発行は、来年3月上旬を予定しております。購読をご希望の方は、同封の振込用紙にてお支払いをお願い致します。注文および支払方法を、郵便振込みによる前払いとさせていただきますことにご理解をお願い致します。

また、当編集部には103号以前の残部もございます。ご希望の方は、104号をお申し込みの際に、振込用紙にその旨をお書き添え下さい。別途、送らせていただきます。

なお、フラテの申し込みは同窓会新聞に同封の払込用紙(11月申し込み分と1月申し込み分の2回)のほか、103号巻末の払込用紙においても受け付けております。すでに103号巻末の払込用紙にて申し込まれた方は今回申し込み必要はございません。

<104号の主な内容(予定)>

- ・特集記事
- 「医師の多様な働き方
- 医系技官について(仮)」
- ・フラテ各地を行く～栃木編～
- ・教室便り(医学部の各教室のご紹介)

- ・新任教授 インタビュー
- ・みどりのベンチ インタビュー
- ・フラテ茶苑(先生方の御寄稿文)
- ・学生の広場(学生の寄稿文) など

【フラテ茶苑 寄稿者募集】

フラテ茶苑では、ご卒業の先生方からの御寄稿文を掲載しております。学生も多く読んでおり、学年を超えた交流の場となっております。原稿執筆を希望される先生は、ぜひフラテ編集部まで原稿をお送りください。また、写真や図なども併せてお送りください。今年度も沢山のご寄稿をお待ちしております。

○内容：自由(学生時代のお話、専門

分野のお話、趣味のお話など)

○形式・字数：自由

○〆切：2017年11月末日

※期日以降のご寄稿に関しましては、次号(105号)に掲載させていただきます。

<お問い合わせ先>

フラテ編集部
TEL/FAX 011-736-1444(留守電あります)
E-mail:frate.med@gmail.com
〒060-8638
札幌市北区北15条西7丁目
北海道大学医学部内 フラテ編集部

告知板

<教授就任挨拶>

東北医科薬科大学小児科

教授



おがわ えいしん
小川 英伸(59期)

東北医科薬科大学は2016年4月に医学部が新設されました。私は北大卒業後、実家を継ぐつもりで東北に戻りましたが、約20年間の東北大在籍後、石巻赤十字病院、帝京大学病院などの勤務を経て、2017年4月に現職となりました。当初の開業志向から大きく転換してしまいました。本学は地域医療を担う人材育成が大きな使命です。これまでに大学からクリニックまで、田舎から都会まで、と幅広く小児医療に従事した経験と、学生時代に北海道で培った「大志を抱け」の精神を、次世代を担う学生や若手医師に伝えてゆければと思っています。

東京慈恵会医科大学 外科学講座

教授



きのした さと き
木下 智樹(60期)

60期木下です。2月1日付で、東京慈恵会医科大学外科学講座(乳腺内分泌)の教授を拝命いたしました。ただ私学には主任教授の他に教授職が複数存在し、私も4人のなかの一人にすぎず、母校の教授とはイメージが違うと思います。卒業後、聖路加国際病院、癌研を経て、慈恵に移り27年、4月より柏から新橋に戻りました。この間、わが国で唯一の承認機器Cryo-Hitを用いた乳癌凍結治療を立ち上げ、究極の“切らない乳癌治療”をめざし臨床試験を進めています。母校の益々の発展を祈りつつ、今後とも、皆様方のご支援を賜りますようお願い申し上げます。

札幌医科大学医学部 医化学講座

教授



たかはし もと こ
高橋 素子(67期)

平成29年9月より、黒木由夫先生(55期)の後任として札幌医科大学医学部医化学講座を担当させていただくことになりました。私は平成3年に北大卒業後、谷口直之先生(43期)の大阪大学医学部生化学講座に大学院生として入門し、平成19年からは同期の佐野仁美先生の後任として札幌医科大学当講座に入門いたしました。これまで同門の先生方々にご指導をいただきましたことを心から感謝申し上げます。糖タンパク質の研究をしておりますが、臨床に役立つ研究ができるよう努力したいと思っております。今後ともご指導を賜りますようお願い申し上げます。

帝京大学医学部内科学講座

教授



こうの はじめ
河野 肇(70期)

平成6年卒業、70期の河野肇です。平成29年8月より帝京大学医学部内科学講座教授に昇任しました。北大医学部卒業後は東京大学医学部病棟内科に入局しました。大学院卒業後、マサチューセッツ大学医学部病理学教室のポスドクを経て、帰国時に帝京大学に着任して7年になります。臨床(リウマチ膠原病、アレルギー)、研究(自然免疫、動脈硬化)、教育等を進めてまいりました。これまで北大の同窓の先生方には様々な局面でご支援をいただいております。心より感謝しております。今後ともご指導、ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

＜学内・院内人事異動＞

＜辞職＞

平成29年6月30日 山下健一郎(69期) 移植外科学分野特任教授(未定)
平成29年6月30日 加納 崇裕(76期) 神経内科学教室助教(帯広厚生病院神経内科)
平成29年8月31日 岡本 祥三(78期) 核医学診療科助教(川崎医科大学特任講師)
平成29年9月30日 小林 鉄郎(84期) 衛生学教室特任助教(ジョージア州立大学研究員)

＜割愛＞

平成29年10月1日 中川 伸(会員2) 精神医学教室准教授(山口大学大学院医学系研究科教授)

＜採用＞

平成29年6月1日 田中 公貴(79期) 消化器外科学教室特任研究助教
平成29年8月1日 小林健太郎(84期) 核医学診療科特任助教
平成29年10月1日 加藤 達哉(73期) 臨床研修センター講師
平成29年10月1日 畑中佳奈子(77期) 臨床研究開発センター特任講師

＜昇任＞

平成29年7月1日 南須原康行(64期) 医療安全管理部教授(同部准教授)
平成29年10月1日 伊藤 侯輝(75期) 精神科神経科講師(精神科神経科助教)

＜所属換＞

平成29年10月1日 斉藤 仁志(80期) 麻酔科助教(先進急性期医療センター助教)
平成29年10月1日 干野 晃嗣(83期) 先進急性期医療センター助教(麻酔科助教)

＜平成29年度神奈川フラテ会総会—講演と新たに設けた“学生の質問を受ける群”の反響＞

平成29年度総会では恒例の同窓の講演の他に新たに“学生の質問を受ける群”を設けた。

講演 (1) “日常診療で気付いてほしい新規遺伝病”
座長 力石辰也先生60
講師 古屋充子先生67
家族性腎癌をきたす新規遺伝病バート・ホッグ・デュベル症候群の概要、鑑別すべきmTOR関連癌と千葉大と横浜市大の医学生、指導者たちと協力して診療チームを作った経緯などを報告した。
講演 (2) “生活習慣病と免疫の接点”
座長 国兼浩嗣先生58
講師 岩瀬和也先生58

NKT細胞はCD1d拘束性に糖脂質を認識・応答するT細胞群でサイトカイン産生や細胞傷害機能で進展(炎症反応)をいろいろな方向に修飾する。生活習慣病での最近の研究結果を報告した。
質疑;それぞれご専門の川上正也先生29から遺伝子について、露木重明先生34からレックリング・ハウゼン病などの関連について現役時代そのままの迫力のある質問がなされた。
“学生の質問を受ける群”
司会 市川靖史先生62
学生は東京と神奈川での研修を考えていたが、当然専門を決めることにも不安を持っていた。彼らが一人一人前に

出て質問しOBが答えた。さらに懇親会の個人の近況報告の時にも答えが話された。医局の選択は教授を中心に考える、専門は興味のある分野を選んで入り順次決めていく方法もある、どの分野に進んでも一生懸命やる必要があるなどだ。座長の国兼先生と講師の古屋先生は第一病理学教室の出身だが、私も学生の時よく出入りさせて頂いた。この教室と縁が深いOBは皆そこで学んだことを誇りに思っている。一時期基礎で学ぶ方法もあると思う。乾杯の音頭を取られた川上先生の「この会は大好きだ」の言葉で始まった懇

親会は例年よりも盛り上がった。それは同窓の講演と新たな試みを全員が楽しんだからだ。「後輩思いのOBが集まり学生と共に本音を語った」という印象を持った会だった。
“都ぞ弥生”斉唱の口上を一昨年に続いて取った国兼先生の美声も全員の発声も一際高らかだったことが会の雰囲気を表していた。神奈川フラテ会HPでそれらを見ることができるのでご覧きたい。
(仁保、武宮、市川、国兼、田中、力石、折館、古屋、前田)

事務局からお知らせ

同窓会費について

○会費納入のお願い

会員の皆様には、会費納入にご協力いただきありがとうございます。

同窓会の事業は会員の皆様の会費によって運営されています。今後も意義ある同窓会活動を継続していくために、会費納入にご理解とご協力をお願い申し上げます。

○会費納入方法

①口座振替、②コンビニ納入、③銀行振込のいずれかによります。

※詳しくは同窓会新聞に同封される払込票裏面をご覧ください。

○会費未納者と刊行物の送付

・未納会費が2年を超える会員には、会員名簿(同窓会誌)をお送りしません。
・納入が9月30日を過ぎると、入金確認及び印刷部数確定の都合によりお送りすることができません。

○会費免除者と刊行物の送付

・会則により、卒業後55年を経過した会員の会費は、翌年度から免除となります。
・37期生は平成29年度から、38期生は平成30年度の会費から免除となりますが、免除前に2年を超える未納会費がある会員には、会員名簿(同窓会誌)をお送りしません。

ドクター総合補償制度のご案内

同窓会では、会員のための「ドクター総合補償制度」を創設し、随時募集を行っています。

現在、本制度には500名近い会員の皆様が加入しており、大変ご好評をいただいています。

ドクター総合補償制度には「医師賠償責任保険(勤務医向け)」、「医療・がん保険」、「所得補償保険」があり、団

体割引が適用されるので個人での契約に比べて割安な保険料で加入することができます。

ドクター総合補償制度につきましては、同窓会事務局にお問い合わせください。

電話 : 011-706-5007

E-mail : furate@med.hokudai.ac.jp

ご寄付のお願い

同窓会では、企業、団体、個人の皆様に、同窓会事業支援のためのご寄付をお願いしております。

ご寄付をいただいた場合、ご了承を得て同窓会新聞にご紹介し、10万円以上のご寄付には、楯または額による感

謝状を贈呈させていただきます。

ご寄付につきましては、同窓会事務局にご連絡ください。

電話 : 011-706-5007

E-mail : furate@med.hokudai.ac.jp

会員名簿の処分にお困りの方へ

会員名簿には個人情報掲載されていますので、ご不用になった名簿は、例えばシュレッダー処分または焼却処分をお願いいたします。なお、ご自身で処分が困難な方は、郵便又は宅配便により同窓会事務局へお送りください。

なお、恐縮ですが送料は各自でご負担願います。

〒060-8638 札幌市北区北15条西7丁目 北大医学部 北海道大学医学部同窓会事務局

北海道大学医学部創立100周年記念事業募金へのご協力をお願い

北海道大学医学部は、来る2019年(平成31年)に創立100周年を迎えるにあたり、北海道大学医学部百年記念館の建設を柱とするいくつかの記念事業を計画しております。

同窓会の皆様を始めとする関係各位におかれましては本事業の趣旨をご理解いただき、格別のご支援・ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

募金要綱につきましては、「北海道大学医学部創立100周年記念事業基金募金趣意書」に記載しております。

趣意書につきましては、以下の方法で取得いただけます。

①ウェブサイトからのダウンロード
北海道大学医学部創立100周年記念事業ウェブサイト
(http://www.med.hokudai.ac.jp/100th/)

からダウンロードいただけます。
②メールまたはお電話によるご請求
医学系事務部総務課庶務担当
(E-mail : shomu@med.hokudai.ac.jp)
電話 : 011-706-5004、5085)
までご連絡ください。趣意書を郵送にてお送りいたします。

北海道大学医学部創立100周年記念事業実行委員会
募金活動小委員会委員長 吉岡 充弘

(問い合わせ先)
北海道大学医学系事務部総務課庶務担当
011-706-5004、5085
shomu@med.hokudai.ac.jp

新刊書紹介



「がんの未来学」

こばやし ひろし
小林 博(28期)著
公益財団法人
札幌がんセミナー
¥1,296

本書は、がん・高齢化をキーワードとした人生の書であり、高齢化に伴うがんの将来像を統計学的データに基づいて解析、独創的な見解を述べた予言の書でもある。

まず、本書「はしがき」の冒頭の3行を引用しておく。ここにあるのは、がん細胞の面妖な実態を熟知する著者の、科学者としての透徹したリアリズムの視線であり、本書の通奏低音ともなっている。

「がんは永遠である。生けとし生けるものに老いと死があるように、人間長く生きればいつかがんになって何の不思議もない。がんで亡くなる人は減っても、がんの発生そのものは人類にとって未来永劫に続く永遠の存在である」

続いて、本書で指摘した著者の独創的な見解を以下の三つに要約しておこう。

一つは、がんの死亡率だけでなく「がん年齢」に焦点を合わせたこと。二つ目は、この「がん年齢」を「罹患年齢」と「死亡年齢」に分け、がん罹患する年齢が遅くなってきた結果として、がんによる死亡年齢も延びてきたと指摘したこと。三つ目は、超高齢者になればいずれは寿命で亡くなる。人間誰しも、いくつになっても死にたくはないが、がんであれば諦

めがつきやすいという見解である。

本書の結びの言葉も要約しておこう。「がん予防の背後には、く社会の成熟化」という大きな働きが求められる。世界の平和が続き、私たちの国が進路を誤らない限り、がん罹患年齢、死亡年齢の延長はまだまた続くであろう(略)

慧眼である。本書は、歴史と社会の未来に向けての希望の書でもあるのだ。

お勧めしたい好著である。

(28期 方波見康雄)



「特発性間質性肺炎(IIP)のすべて」

ほん ま けいこ
本間 行彦(37期)著
西村書店
¥7,344

特発性間質性肺炎 (Idiopathic Interstitial Pneumonia; IIP) は原因不明の間質性肺炎である。炎症性疾患にも関わらず予後は一般的な悪性腫瘍よりも

悪く、診断から死亡までの平均期間は2～3年とされる。これは、悪性腫瘍の中でもすい臓がん、肺癌に次ぐ短さである。このため、本症は1974年から厚生省特定疾患に指定され(当初は原因不明の間質性肺炎・肺線維症と呼ばれていた)、現在に至るまで、継続的に研究が進められるとともに、難病に指定され、患者さんの医療費補助等が行われている。現在、新たな治療薬が次々に

開発され、呼吸器領域では最も注目されている疾患である。

本書は、特発性間質性肺炎 (IIP) の名付け親でもあり、半世紀にわたり本症と対峙し、その本体を極めるべく努力してきた著者の集大成ともいべき一書である。私の恩師でもある著者は、西洋医学はもとより東洋医学にも精通し、更には、数学、物理から科学哲学までの幅広い学識を持つ類希な人物である。本書で

は、IIPの本質とは何か、その治療はどうあるべきかが鋭く切り込まれている。特に、散逸構造理論を基礎とした生体の外因に対する反応パターンから疾患を捉える考え方は秀逸であり、漢方薬の有効性も見事に提示されている。IIPを理解するため、患者さんはもとより、本症に関わるすべての医療人には是非一読して頂きたい名書である。

(53期 棟方 充)



「運動するとき スポーツドリンクを飲んではいけない」

しみず やすゆき
清水 泰行(70期)
廣済堂出版(健康人新書)
¥918

昨今、メタボリックシンドロームやそれに関連する疾患が世界的に問題に

なっている。この本の著者は数年前まで典型的なメタボリックシンドロームであり、中性脂肪も非常に高値を示していたが、一念発起して食事を見直し、2カ月で8kg減量に成功し、その後血液検査でも正常化した。その後、痩せたことを機にマラソンをはじめ、フルマラソンに挑戦。完走はできたが記録が

伸び悩み、さらに食事を見直し、大幅に記録が更新した。体重も最も肥満であったころから比べると18～20kgも減量に成功した。

そんなメタボリックシンドロームから抜け出して、フルマラソンやウルトラマラソンの記録がどんどん伸びて行った体験記と、医学的論文による様々

な考察を行い、運動する人だけでなく様々な人にとって、著者が最良と考える食事法を提案した本である。現在市販されているスポーツドリンクの問題点に触れつつ、さらに様々な栄養に関する話題を満載している。

(70期 神島 保)



「グローバルリーダーを育てる北海道大学の挑戦」

たましろ ひでひこ
玉城 英彦(会員2)他編著
彩流社
¥2,700

本著はまさに、日本の大学がグローバル化の荒海の中で、いろいろと模索している今、時宜を得た出版である。

本書の構成は1) 多文化理解と多様性の涵養、2) グローバル時代に生きる、

3) 新渡戸カレッジの挑戦、4) フェローは語る、5) メッセージを読み解く-グローバル社会への対応である。

2013年4月にスタートした北海道大学の特別教育プログラム新渡戸カレッジのミッション、活動などを通じて、グローバルに活躍することが期待される人材に不可欠な要素、つまり多文化理解および多様性の涵養などについても詳細に叙述している。

本プログラムの活動の特徴には、1)

原則1セメスター以上の海外留学、2) プログラム運営に対する北大OB新渡戸カレッジフェローの参加がある。本著は、新渡戸カレッジプログラム全体の大要を解説するとともに、「グローバルに生きる」をテーマにした第一期生のフェロー10人のメッセージも集約している。

海外・人生経験が豊富なフェローの視点は多種多様であり、「グローバルに生きる」においても人それぞれであることを改めて認識させられる。グローバルで

活躍するためには、豊かな個性を醸成することが必要であり、「他人の中に埋没しない私」を確立することであるとも。

本著は、北海道大学の4つの理念に則り、さらに新渡戸稲造の精神を鏡として、グローバル人材の基本を分かりやすく詳細に記述した挑戦的な本で、特に北大生には必読の一冊である。

(81期 村上 学)



「手洗いの疫学とゼンメルワイスの闘い」

玉城 英彦(会員2)
人間と歴史社
¥1,944

本著は、世界で初めて病棟に「手洗い」を導入した、ハンガリーの医師ゼンメルワイスの壮絶な闘いの物語である。

若きゼンメルワイスは、19世紀半ば、世界の医師や研究者らの誉の場所であっ

たウィーン総合病院の産科第一病棟の医長として、妊産婦の診断や治療の他に病理解剖に明け暮れていた。産科病棟においては、生命誕生という本来祝福されるべき若い母親たちが産褥熱で大勢亡くなっていた。出産に伴う死は神に召されたもので、人間の業の及ぶところではないと、医師や関係者誰もそれに疑問を唱える人はいなかった。

しかし、ゼンメルワイスは違った。同じ病院の産科第一病棟と第二病棟との間

で産褥熱の死亡率に大きな格差があることに気付き、その原因を今でいう疫学的手法をもって徹底的に調査した。これは彼の運命の悲劇の始まりだった。

病気の原因のパラダイムが細胞から細菌に替わる狭間であって、ゼンメルワイスは時代に、そして権威に抗って、「手洗い」の効果科学的に証明し、その結果を病棟に取り入れ実践することにより、産褥熱の予防に成功する。しかし、彼の説を受け入れるほど、学会

や社会はまだ熟していなかった。

本著は1人の疫学者の視点から、パラダイムシフトの中で、予測不可能なさまざまな困難に立ち向かう若き医師の足跡を追った、読み応えのある医学史の書である。ぜひ一読を薦める。

最後に本著は、今は亡き、故寺沢浩一北大名誉教授に捧げたものであることを記す。

(81期 村上 学)

北海道大学医学部 創立100周年記念事業ウェブサイト開設

北海道大学医学部 創立100周年記念事業

北海道大学医学部は2019年に創立100周年を迎えます。この記念すべき節目を祝い、さらなる発展を期するための100周年記念事業を行うことになりました。今後とも医学・医療の発展に寄与するとともに、人材養成を通じて地域社会や国際社会に貢献してまいります。皆さまのご支援を心よりお願い申し上げます。

北海道大学医学部創立100周年記念事業実行委員会 北海道大学

最新のお知らせ・ニュース
2017/06/05 展示資料に関する情報をご提供のお願い

募金状況
平成29(2017)年6月現在の募金状況
募金目標額 1,000,000,000 円
17.5 %

北海道大学医学部では、2019年（平成31年）に創立100周年を迎えるあたり、北海道大学医学部創立100周年記念事業ウェブサイトを開設いたしました。

記念事業に関する様々な情報をリアルタイムに更新する予定です。募金や展示物の提供に関するお願いも掲載しておりますので、ぜひご覧

いただきますようお願い申し上げます。ウェブサイトに関するお問い合わせは医学系事務部総務課庶務担当までご連絡ください。

札幌市北区北15条西7丁目
E-mail : shomu@med.hokudai.ac.jp
TEL : 011-706-5004, 5085
http://www.med.hokudai.ac.jp/100th/

同窓会費の納入は口座振替で

同窓会費の納入方法は、①口座振替、②コンビニ納入、③銀行振込のいずれかです。

特に口座振替は、店頭へ出向く手間が省けます。また、納入忘れがないのでとても便利です。

口座振替を希望する方は、事務局にお申し付けください。手続きに必要な「預金口座振替依頼書」をお送りします。ホームページからもダウンロード出来ます。必要事項を記入の上同窓会事務局へ送ってください。

電話 : 011-706-5007 E-mail : furate@med.hokudai.ac.jp

同窓会費納入のお願い

同窓会事業は会員の皆様から納入された会費によって運営されています。会費納入にご理解とご協力を切にお願い申し上げます。

ご逝去者

新聞157号発行以降、ご連絡いただいた方を掲載しております。

御逝去年月日	氏名	期	御逝去年月日	氏名	期
平成27年 5月20日	大野 勝彦	25	5月25日	野正 宏	44
平成28年 12月13日	山 廣 健三	33	5月29日	小茂 武	21
平成29年 1月4日	加藤 齊	40	6月1日	武部 和	31
2月2日	山 真	38	6月12日	加藤 三	専4
2月11日	上野 健	35	6月15日	斎藤 孝	36
2月27日	布施 良	27	6月17日	大 隆	23
3月17日	植竹 公	20	7月16日	八 夫	28
3月23日	田下 武	29	7月22日	西 信	34
4月8日	野 純	19	7月29日	吉 誠	28
4月25日	中村 準之助	31	7月30日	近藤 富貴	専5
4月26日	内藤 賢一	22	7月31日	尾 谷	42
4月30日	家崎 智也	専新6	8月8日	黒田 知	29
5月1日	橋田 鉄	40	9月5日	大平 整	38
5月21日	伊藤 英	28	9月10日	芦田 眞	40
			9月10日	富樫 正	49
			9月22日	佐藤 正	35
			10月5日	篠田 悠	44

同窓会新聞は142号からHP上でご覧いただけます。アドレスは次の通りです。
http://www.med.hokudai.ac.jp/alum-w/news/index.htm

北海道医学会からお知らせ

○北海道医学会ホームページURL

北海道医学会のホームページを開設しました。下記URLよりご覧ください。

<http://www.med.hokudai.ac.jp/hms/>

○北海道医学会について

北海道医学会は北海道における医学の進展を図るため、大正12年に発足した学術団体です。北海道大学、札幌医科大学、旭川医科大学の医師、医学研究者及び本会の目的に賛同される方々には一般会員として、道内の主要医療機関には特別会員としてご参加いただいております。

○主な活動内容

- ・機関誌「北海道医学雑誌」の発行（5月、11月：平成29年は第92巻）
- ・学術集会「市民公開シンポジウム」の開催（10月下旬：昭和41年から実施）

・若手研究者への「研究奨励賞」の授与（年3名以内に賞状及び副賞：昭和58年から実施）

○入会のご案内

本会に入会されていない同窓会員におかれましては、是非ご入会いただきますようご案内申し上げます。医療機関としてのご入会も歓迎します。

なお、会員には機関誌「北海道医学雑誌」を発行の都度お届けいたします。

入会方法、申込書は、本会ホームページ（コンテンツ：入会ご案内）より入手してください。

○お問い合わせ先

北海道医学会事務局
電話 : 011-706-5007
E-mail : digakkai@med.hokudai.ac.jp

2018年北海道大学医学部、北海道大学病院、北海道大学医学部同窓会合同新年会および北海道大学医学部創立100周年記念事業後援会総会のご案内

今年の新年会は150名を越える同窓生および関係者が集まり盛会となりました。来年も同様に行いますので医学部同窓生の皆様はふるってご参加ください。

日時：2018年1月11日木曜日 午後6時から

場所：札幌グランドホテル

会費：6-7000円（予定）

対象：北海道大学医学部同窓会会員、医学部教員、病院教員など幅広い関係者

申し込み方法：参加希望の方は、住所、氏名、電話番号を明記して、電子メール、お葉書、ファックスにて同窓会事務局まで連絡してください。北大教員は別途紙媒体で出席をとります。

出欠の締め切り：2017年11月17日

(発起人) 医学研究院長吉岡充弘、病院長寶金清博、同窓会長浅香正博 (幹事長) 岩崎倫政

一面の写真説明

「晩秋」 高橋 敦(42期)

5月末と10月末に札幌を訪ねて約10年。勉強会と仕事の合間に東京より遅い新緑と一足先の紅葉を楽しんだ。行動範囲は

北大構内。植物園から旨い魚を食わせる店がある狸小路の間に限られる。ヒトの眼より明るいレンズ F0.95 は優れた描写力をもつ。右手が銀杏並木の辺りにこの色でなければならぬ古いミニが駐まっている偶然に恵まれた。

編集後記

今号では、同窓の先生がたの教授就任を含めた動向やカダバートレーニングの紹介、部活動の活躍状況など多彩な情報とともに、浅香正博先生と吉岡充弘先生から2019年に迎える創立100周年事業に向けて佳境の時期を迎え、医学部百年記念館の建設を含めた記念事業の概要紹介がなされています。その

なかで、この100周年記念事業の目的は北海道大学医学部と同窓生との交流を促進し、年代を超えた意見交換の中から新しい北海道大学医学部を創造していく端緒にすることであるとも紹介されています。創立100周年事業の成功に向けて、みなさま、どうぞご協力をよろしく申し上げます。

(67期 矢部一郎)